



前回書いたように、わが国のセメント消費量がピークを記録したのが1991(平成3)年。私が学部を卒業した年でもある。現在までの私の土木屋生活はひたすら建設需要の減少の歩みでもあった。現在まで続く建設需要減少のきっかけは言うまでもなくバブルの崩壊であろう。経済企画庁(当時)は、平成景気の期間を1986年12月開始、1991年4月終了と発表している。私の学部在学期間にほぼ一致するという因縁である。

今回は、バブルとは何だったのか、建設需要の点から前後各10年間(1975～2000年度)と比較しながら考察してみよう。その際、土木と建築とに区別することにしたい。官公需主体の土木と民需主体の建築とでは建設需要の動きが異なっていると思われるからである。

最初に、建設投資額の推移を示す(図-1)。いずれも1995年価格による実質建設投資額であるため、時間の推移にかかわらず比較が可能である。バブル期に入ると投資額が増加しバブルが終了すると同時に減少に転じたのが建築である。一方、土木の投資額もバブル期に



Joker 2号 大内雅博の

当たらずとも いえども 遠からず

連載

正会員 編集委員・大内雅博 OUCHI Masahiro (高知工科大学助教授)

は増加していたが、バブル終了後1995年まで増加し続けた。これが民需と官公需との違いなのであろう。いずれにせよ、われわれがもっているバブルのイメージに近いのは建築のほうである。

お金では以上ようであった。では、建設した構造物の量ではどうか。土木と建築に分ける必要があるため、今回は、生コンクリートの出荷量の統計データを用いることにした。生コンクリートの用途別の使用量に関して詳細な統計が整備されている。セメントの生コン転化率は1975年で61%、1988年に70%を超えて現在に至っている。すなわち、**当たらずといえども遠からず、生コンクリートの用途別**

出荷量が建設した構造物の種類ごとの量に対応していると見なした。

土木と建築向けそれぞれの生コンクリート出荷量の推移を示す(図-2)。ここでも土木と建築は異なる動きをしている。バブル開始と同時に急激に増加し、終了と同時に急減に転じたのが建築である。一方、土木はバブル期にはほとんど変化がなく、バブル終了と同時に減少に転じている。こちらについても、バブルのイメージに近いのは建築であろう。

以上、お金と構造物の量のそれぞれからバブル期の建設需要の推移を見た。では、これら2つの指標の間にはどのような関係があるのか。土木・建築それぞれについて

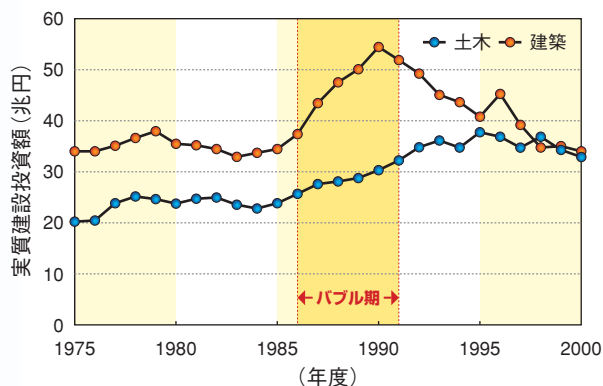


図-1 実質建設投資額の推移(1995年価格)

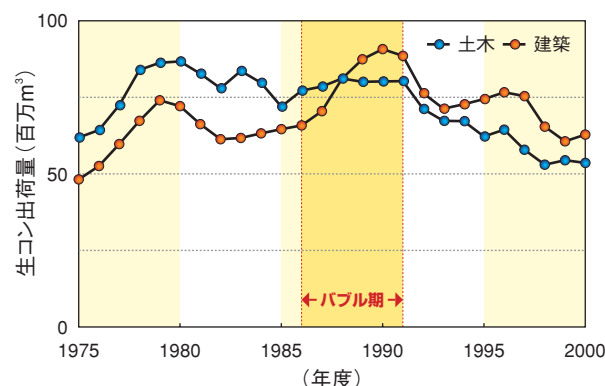


図-2 用途別生コンクリート出荷量の推移

バブルとは何だったのか？

て、実質建設投資額 1 億円 (1995 年価格) 当たりの生コンクリート出荷量 (m³) の推移を求めた (図-3)。生コン出荷量と建設投資額との比を、投資額当たりの建設した構造物の量を表していると見なした。この値が大きいほど、同じお金をかけてより多くの構造物を建設していることになる。

バブル期を含め、その前後から値がほとんど変わらないのが建築である。一方、土木では 1980 年からひたすら値が下がり続けている。とはいえ、土木建築とも、1980 年からの傾向が少なくとも 2000 年までは継続し、その途中にバブル期があったに過ぎないことがわかる。値が 20 年以上も一定である建築

はともかく、土木の減少傾向はどういうことなのだろうか。環境対策など、純粋な建設工事以外のコストが増えているのか、あるいは、コンクリートを使用しない構造物へのシフトなのか、知りたい気がする。

ここでもうひと声、土木・建築の各生コンクリート出荷量を実質 GDP (1995 年価格) で割った値の推移を示す (図-4)。これをわが国の経済活動全体における建設した土木構造物や建築物の量の位置づけの推移と見なす。バブル期には建築のみやや盛り返したように見えるが、1980 年ごろから値が緩やかな減少傾向にあるのは土木・建築共通の傾向である。

以上、バブル期を中心としてわが国の土木・建築の建設需要の推移を見てきた。民需主体の建築は別にして、土木について言えば、バブル期に特別な傾向が現れたというよりは、むしろそれ以前からの傾向が連続し、バブル崩壊以後も継続したととらえたほうがよさそうな感じである。

ただし、バブル崩壊と同時にそれまでほぼ一定値を保っていた土木向け生コンクリート消費量が減少に転じた点だけは、バブル崩壊の影響なのかどうか、あるいは社会基盤整備が進んできた結果なのか、考察してみる価値があると思う。

謝辞：生コンクリート消費量についてのデータは (株)セメント新聞社よりご提供いただきました。心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 日本の GDP の推移：日本国勢図会 2004 / 2005、矢野恒太記念会
- 2) 建設投資額：国土交通省ホームページ <http://www.mlit.go.jp/toukeijouhou/chojou/index.html>

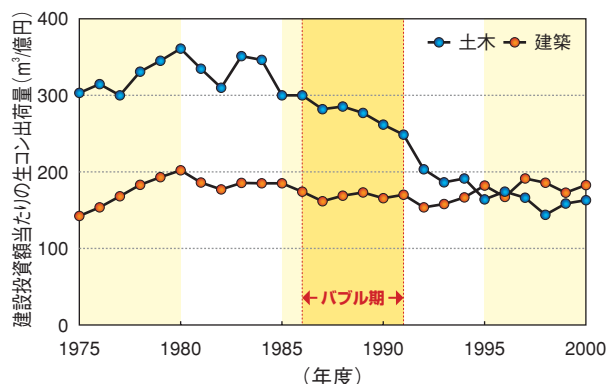


図-3 土木・建築それぞれの建設投資額当たりの生コン出荷量 (建設投資額は 1995 年価格)

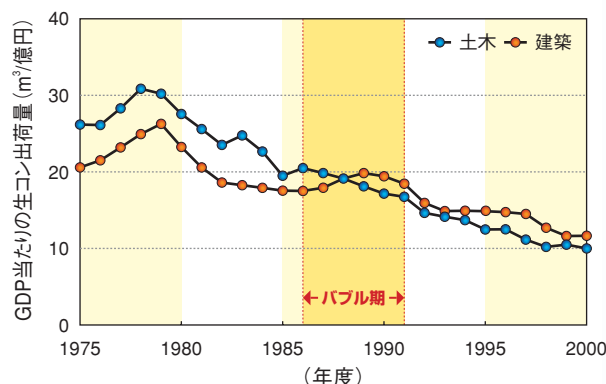


図-4 GDP 当たりの土木・建築向け生コンクリート出荷量 (GDP は 1995 年価格)

(キャラクター&外枠デザイン：宇野洋志城)